

第1分科会 学習者の変化と感動、家族とのコミュニケーション

当日、応援スタッフとしても関わってくださったニューワンス株式会社（滋賀県大津市）真情（まごころ）デイ・サービス南志賀の学習療法リーダー猪原央子さんが報告レポートを作成されました。そのレポートからの抜粋という形で、第1分科会をご紹介します。

第1分科会は100名強の参加があり、3つの施設からのご発表後、17グループでディスカッションを行ないました。

【3つの発表のご紹介】

●北海道／社会福祉法人光寿会 介護老人保健施設 ケアステーションひかり 常務理事 森 須賀子様

最初は看取りケアから復活された事例。「寂しい…」というご利用者の声をきっかけに、学習療法を通して寂しさを克服するケアを開始。何も食べられず点滴の針も入らない状態のご利用者、初めは寝たきりのままベッド上で読み聞かせを行った結果、1カ月後に物が食べられるようになった。その後は、しっかりと机に向かい、自分の名前を書かれるまでになった。その様子がビデオに収められていた。また、ご家族からのコメントでは「『いやだいやだ』と言いながらも（学習療法は）結局本人にとって良いことなんだなと思えた」とご家族がとてもいきいきとお話くださり、ご利用者、ご家族ともに笑いに溢れたビデオレターだった。天に召されようとしたMさんを引き戻したのは、ご本人の生命力の強さとご家族の愛情と絆の深さももちろんあったが、スタッフの“気づく”力とそれをケアに活かす力が大切であったという。「感動がモチベーションとなって人を動かす」のだと学んだ。2つめの男性の事例も感動的だった。

●愛知県／医療法人杏園会 デイサービスセンター ろくばん 管理者 森本恭一様、ご家族 Y様

家族交流会を開催したきっかけは、送迎などの限られたコミュニケーションでは、学習療法の効果や



グループ討議時：左が真情デイサービス南志賀 猪原さん、右が永寿園 中島さん

意義、魅力がなかなかご家族に伝わりにくいため、もっとダイレクトに発信をしたかったからという。家族交流会の開催で得られたことは3つ ①（ご家族との）新たな信頼関係の構築、②スタッフの成長、③創造力の向上。

ご家族のY様は、年に数回行われる家族交流会がご家族の楽しみになっているというお話をされた。家族交流会で学習時のビデオを見て、お母様の普段家では見られない明るくにこやかな表情に喜び、参加者同士の話の輪が広がり楽しいひとときを過ごす。お母様にとって「ろくばん」は、やすらぎの場であり、生活の一部として生きがいになっているとのこと。

●福岡県／社会福祉法人道海永寿会 特別養護老人ホーム永寿園 介護主任 中島宏子様

10年間の学びや多くの感動を会場の方と共有。まず、学習療法の今までの経過をお話いただく。当初は「学習者の変化」→3年後は「職員の育成」→その後は「チームケア」→「施設全体の向上」…と学習療法での変化の段階があった。10年間の学習療法で培ったデータも紹介された。まず驚かされたのが、10年間学習継続の学習者において、現在ご存命の方が6名で、寝たきりは0名。一方で、学習療法をされていない方において、現在ご存命の方は2名で、皆さん寝たきりになってしまっている。学習継続の方は「寝たきり」がいらっしやらないということ。その後、継続学習している6名の方のその後の様子を報告。10年間も期間変わらず学習を維持されていることに思わず拍手を送りたくなった。

【まとめ】

私が勤務するデイサービスで「本当の意味でのケアができていのだろうか」とふと思いました。振り返ってみると「食事は食事」「入浴は入浴」「排泄は排泄」「学習療法は学習療法」と一貫していません。多くの施設では、学習療法を通して利用者の機能向上、生活の質の向上をめざしていらっしや、それぞれがつながっていることを学びました。私たちは学習療法を生活向上のツールとしてうまく活用し、利用者一人ひとりと個別に向き合い、ケアしていくことに努めたいと強く思いました。